

河上肇記念会報

No. 18

1984. 9. 10

〒542

大阪市南区島ノ内一丁目一九（丸善石油ビル）

千代田商事内 河上肇記念会

電話 (〇六) 二五二一三六九六

振替口座 大阪 三三一九五

一九八四年度 総会御案内

猛暑の夏も漸く終り、秋の気配がする日頃となりました。いかがお過ごしでしょうか。今年の総会の日程をお知らせいたします。

今年は南海電鉄会長の川勝伝氏をお招きし、河上の活躍した昭和初期の思い出と現代の問題についてのご講演を頂く予定です。現在、川勝氏は財界とともに他方面でご活躍、とくに朝日新聞の「私の紙面批評」をご担当、八月一九日朝刊で、今日の「重要な問題は、その本質を正しく把握して、日本の新しい良心をもって、考え、かつ実践すること」を提起しておられます。

多数ご参会下さるようお願い申し上げます。

一、日時 一九八四年一〇月一四日（日） 午前十一時～午後三時

二、場所 法然院

（京都市左京区鹿谷御所ノ段町二四）

会場案内図（三ページ）参照

一、臨時会費 四、〇〇〇円（会場費、昼食費含む）

同封のハガキで一〇月五日までに出席のご返事をお願いします。（お

手数ですが四〇円切手を貼って下さい。）

目次

△追悼▽

大島清先生を悼む

——大島先生と東京河上会——

……住谷 一彦 (2)

大河内一男先生を偲ぶ

……大門 英太郎 (4)

郷里における河上先生 ……脇 英夫 (5)

会員通信 …… (6)

当番雑言 …… (8)

八四年総会案内 (1)、図書紹介 (3)、編集後記 (9)

追悼

大島清先生を悼む

— 大島先生と東京河上会 —

住 谷 一 彦

一九八四年五月一五日大島清先生が急逝された。入院してわずか一週間の出来事であった。多くの新聞が先生の訃を報じたが、ここでは「社会新報」五月二二日号から引用しておこう。「法政大学名誉教授の大島清（おおしま・きよし）氏は十五日、がん性腹膜炎のため東京・新宿区の国立病院医療センターで死去した。七十一歳。葬儀と告別式は十八日午後一時から武蔵野市吉祥寺南町で行なわれた。喪主は長男卓（たく）氏。大島氏は南満洲鉄道会社調査部に入社、戦後、法政大学経済学部教授となり、学部長、理事、大原社会問題研究所長を歴任。農業経済を中心に理論経済学および労働運動史に取り組む。社会党の農業政策立案や全日農など農民運動の発展にも尽力した。主な著作に『農地改革と農業問題』『資本と土地所有』『高野岩三郎伝』『標的を撃つ』などがある」

もちろん、新聞の報じるところは簡略であって、委細を尽してはいない。しかし、少なくともお若干のことがつけ加えられて然るべきであろう。その一は、一九三一年七月、大島先生が新潟高校二年生のとき、全学ストに関係して退学処分を受け、その後一年半は労働運動に従事し、治安維持法、出版法違反に問われ、何度か検挙されたこと。その二は、一九三七年四月、東北帝大文学部経済学科に入学、人民戦線事件の余震で起訴され一ヶ月停学処分となったこと。これらの出来事は、大島先生が終生実践的な関心を持ちつづけたエートスの原点を開示するものである。その三は、農民運動史研究会の代表幹事として、はじめて日本の農民運

動を概括した「日本農民運動史」（一九六一）を完成されたこと。ここには実践へのパトスを心底に秘めつつも冷静に醒めた眼で日本の現実を分析する学者大島清の姿がある。最後に、どの記事にも触れられていないが、最晩年の二年間、残された余力のすべてをそいだ東京河上会代表幹事代行としての大島先生の御仕事が挙げられねばならない。それは大島先生の人生を圧縮して示していると思われるからである。

私が農業経済学者、農民・労働運動史家としての大島先生とはなくおつきあいするようになったのは、一九八〇年二月二七日の総会で大島先生が幹事になられてからであった。「会報」No.四六は、「幹事陣には健康をそこねている者もあって、これを強化する必要から、白石代表は大島清氏を推し、満場一致でこれを了承、ついで大島氏が受諾のあいさつをされた」と記している。もっとも大島先生と東京河上会との関係は少し遡って前年の河上肇生誕百年記念講演会を朝日講堂で開催したときに講師の一人として「河上肇と櫛田民蔵」の講演をされたときにはじまる。そのとき白石凡先生は大島先生に後を頼もうと決意されたのである。秋の或る日私は白石先生に呼ばれてその是非を聞かれたことがある。無論私には異議のあらうはずはなかった。ただ、学問以外の世界に對峙する場合に若干の懸念が残った。ところが、大島先生は即座に快諾されたのである。あとで想えば、大島先生にはそれなりの決意があったからだということになる。こうして、大島先生の活動が始まった。その年六月三〇日河上会例会で、「河上肇と大内兵衛」と題して話しをされている。その「むすび」は「この二人の偉大な知識人の生と死をどう受けとめるか——それは残されたわれわれの重い仕事であると思う」で終っているが、おそらく大島先生は、東京河上会の御仕事を自らの生と死における「重い仕事」の一つとされたのではなからうか。一九八一

大河内一男先生を偲ぶ

大 門 英太郎

先日、暑中御見舞を差上げて、御起居を伺った直後に計報に接し愕然とした。先生とは河上肇記念会も直接関係はなかったのであるが、一九七九年秋、河上肇生誕百年祭の企画のメインイベントたる記念講演会の講師をお願いしていた鯉川先生が健康上の都合で急に出席不可能になり、日時は目前に迫って来るし弱り切って脇村義太郎先生に御相談した所、大河内さんがよからうという御推薦があったので時間のないまま失礼であったが電話で窮状を訴えてお願いした所、面識もない私の願を聞き届けて頂く事が出来た。早速、私の会社の東京支店から新幹線の乗車券をお届けしたまではよかったのであるが、前日来の台風の余波でダイヤが乱れに乱れて、グリーン車も指定席もなかったのではなく超満員で私が京都駅にお迎えに行き先生を見付けた所、御老体東京からすし詰の車中立ちづめであった由、恐縮この事であった。勿論昼食もとっておられぬとの事、途中河原町のロイヤルホテルで幕の内弁当を差し上げて、京都大学経済学部にお案内したのは講演会も半ばをすぎた頃であった。東京からの強行軍でお疲れの上充分休憩もとって頂けぬまゝなので適当に端折って下さって結構ですとお願いしたのであったが、お疲れにも不拘、諄々たる力演で法経第一のあの大讲堂を埋めつくした聴衆を捕えてはなさず終った頃はすでに夕闇が迫っていた。『昔、河上先生が毎週学生に講義をなさったというこの大教室の外はだいぶ暗くなってきました。長時間、ご静聴下さいまして有難うございました。』この言葉を残して万雷の拍手を背に壇を降って行かれる光景は忘れる事が出来ない。(演

題「河上肇における「求道」の問題」新評論社刊、住谷一彦編「求道の人・河上肇」(55頁/80頁)収録)

その夜は洛北「松乃」の懇親会にも出て色々お話を承り、曼珠院畔の関西セミナーに泊って頂いた。翌日の法然院の墓前祭、全国交流会にも帰京の時間を伸して出席、河上先生御遺族にも会って頂いた。

これを契機に私は江古田の先生邸に伺ったり、交誼を頂いて今日に至っているのであるが、

河上肇記念会の推移についても常に心にかけて頂いていた。今計報を聞いて往年の事を思うと共に、大河内先生を捕えた河上肇の求道の精神の強さを今更ながら思っているのである。(写真は百年祭の折、墓参される大河内先生、安井功氏撮影)



郷里における河上先生

脇 英 夫

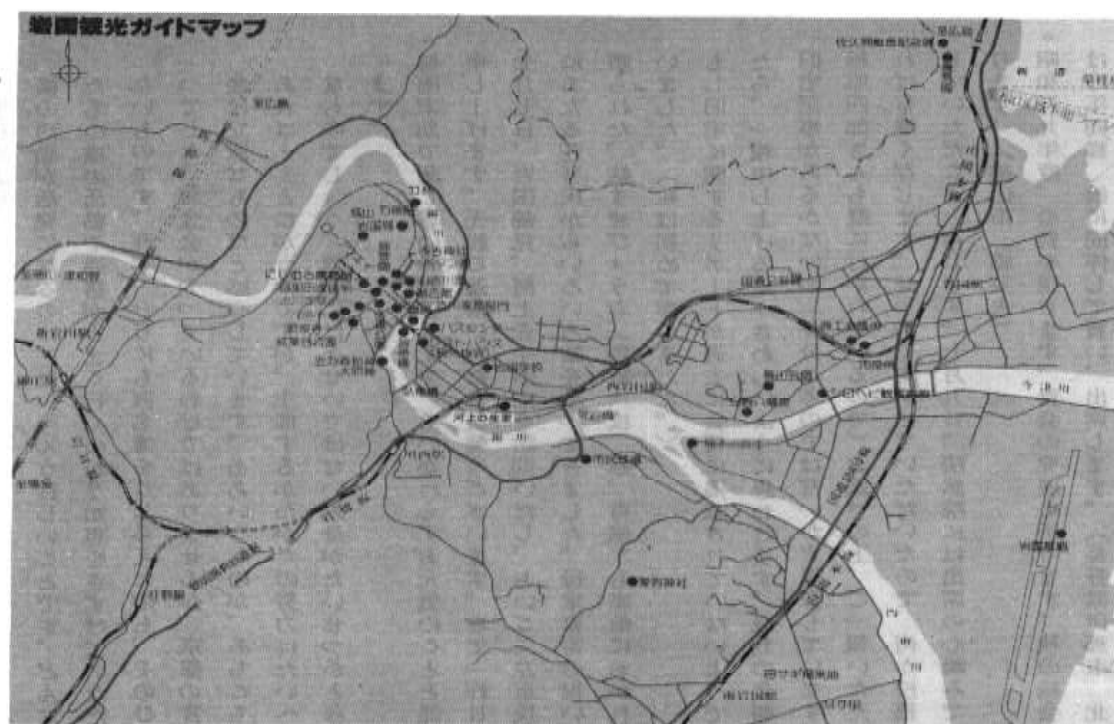
生前の河上先生とは一面識も持ちえなかった私ではあるが、先生の去られた後の京大経済学部に入學して、先生の著書や、河上肇編集『社会問題研究』に親しんで、深い影響を受けた外に、郷里を同じくするという縁につながれている。といっても先生は岩国生まれ、私の父は萩生まれで共に山口高等学校に学んでいるが、先生は私の父より若く、学校も五年程のちがいがある。しかし父もまた、河上肇を読んでいて私の小学校六年の頃、父の書架にある『祖国を顧みて』を読み、ロイドジョージ首相の進歩的社会政策をはじめ知ったことを記憶している。

私の京大入学は一九二九年で、先生は、一九二七年三・一五事件に続く、大学への圧迫の犠牲となられ、講壇に先生の姿をみることはできなかった。私もまた学生運動に加わったので、京大有志学生による歴史的な「河上先生送別会」に出席し、はじめて先生の風ばうに接することができたのである。

京大在学中や、その後のことは省略して、一足跳びだが、戦後私は郷里萩に帰り住み、本職の余暇に地方史研究を手掛けるようになり、ここで若き日の河上先生の足あとに触れる機会が生まれることになる。

萩市立図書館に所蔵されている地方紙「防長新聞」を地方史の資料をもとめて繰っていくうちに、河上肇投稿記事または講演筆記を、明治三四、三五、四三年の紙面に発見した。

私は東京河上会に連絡し、同会報第一七、一八、一九号に再録してもらった。その中には私の新発見とはいえないものも含まれていたが、こ



れを見つけた時は嬉しかった。

また、大正十年前後のことと思われるが、河上先生と河田嗣郎博士而京大教授が、山口県教育会の招きで夏季講習会講師として来県し、萩で講演された時、松陰神社に参拝し、揃って記名した記名帳の断片を、当時の神職が張り交ぜ屏風に残っているのを、友人に案内されてみにいったこともある。

次は、三年位前のことであるが、先生の山口高等学校時代の学籍簿(成績簿)に對面できたのである。山口高等学校の後身は山口高等商業学校を経て山口大学経済学部になっている。私は安部一成学部長(当時)のご厚意で、学籍簿をみる事ができた。幸い河上先生の入学した明治二十九年の分から保存されているので、三年間の学業成績がしるされている学籍簿に接した。コピーをとることも許されて、その要点は「東京河上会報」に発表した。そのコピーは複製して、京都府資料館へ送り、同館河上華文庫資料の一に加えていただいたのである。

そうして、最後に、去る七月七日私は、岩国錦帯橋に近い侍屋敷錦見(にしみ)にある先生旧宅をはじめ訪問する機会を得たのであるが、これは項を改めて報告したい。(地図は岩国市刊行のものより)

〔付記〕大門先輩のご要請のままに、筆をとりましたが、私事にわたることが多くなりましたことをお詫び申します。

会 員 通 信

一

。謹啓、暑い日射しが射し込み、梅雨も一服の状況です。会報、内容が充実してとても楽しく拝読させていただきました。会員の皆様と横の活動が取り入れられたら、会の発展も進むのではと考えましたが、い

かがでしょうか。七月三日 草々。(山口県防府市 上田隆)

――事務局より――

横の活動が活発になるのは、たいへんうれしいことです。どんなかたちの横の活動や連絡がうまく行くのか？知恵をさずけていただきたいものです。昨年、むりにも仮名簿をこしらえたのも、そのひとつでした。記念会がやっているわけではありませんが、京都の音読会は立派なものだと感心しています。ああいうものが、あちこちにあれば……とねがうのですが、主催するかたがたの努力はたいへんなものでしょう。運動にはぎせいではない献身がたいせつかと存じます。

。梅雨末期で蒸し暑い日が続きます。あいかわらずお元気のことと拝察申し上げます。先般ご返信いただき有難うございます。さて一昨日、七月七日、岩国錦見、河上先生旧宅を訪問いたし、おいご(左京氏息)にあたる莊吉氏からいろいろ話を承ってきました。母堂喜寿の祝いに贈られた、帖まぜびょうぶ(色紙八枚、筆、青楓)も座敷におかれていました。(私は初めて参りました。)

もし旧宅に関するリポートが過去に会報に掲載されていないようでしたら、一報申し上げるにふさわしいように思われます。既刊の会報に旧宅記事があるかないか(多分あるのではないかと想像しています。杉原四郎さんも既に行かれていますので)お調べの上、ご一報いただければ有難く存じます。せっかくすすめていただいたので、何か投稿させていただくかと存じます。七月九日、法然院には出席の心組みであります。(徳山市 脇英夫)

。昭和五十九年度、会費を送ります。貴会の発展を祈ります。秋の総会には昨年同様、娘に同伴して貰い、出席します。(長野県伊那市 北原 通)

。会費送金いたします。記念会欠席者の通信もさることながら、当日の出席者のお名前もご発表になることを望みます。(奈良県生駒郡三郷町 山崎宗太郎)

——事務局より——八四総会のご出席の方の通信と、出席者のお名前など会報に載せさせていただきます。

。遅くなって相済みません。移住後のおはき有難く拝見いたしました。この草津の地は、普通電車でわずかに二五分のところですが、京都の建物や自動車の密集地と違ってかわり、森や田畑が多く、まるで別世界です。こんなところが京都のすぐ近くにあるとは知りませんでした。

一九八四、七、三、(滋賀県草津市 田中米一)

。安井功様 一向に明けそうにない梅雨空にうんざりしている此の頃です。お体の方如何です、季節の変わり目が影響するそうですからお悩みかと案じております。昨日の日曜日は上野さん宅へ四人が集まりました。今度彼女は公園住宅へ移転しましたので、それを口実にして飲んで食べておしゃべりをして一日中楽しみました。そのうち最も重要な話題は京都への旅でした。安井さんのおかげで初期の目的を全部達しました。河上先生、山本先生の墓参に、思いがけなくも大塚有章先生の墓参も出来ましたのは誠に有難き幸せでした。ただ残念なのはお花が大塚先生のところになかったことでした。またの機会までお許しいただくことに「合掌」 それに致しましても今回はお体の具合も本調子ではなかったのしょうに大変お氣を使つて御案内下さり唯々感謝に耐えません。ありがとう存じました。改めて厚く御礼申し上げます。それに河上会の方から会報が四人の処に送られました。安井さんの御配慮だと思ひます。振替用紙も入っておりますが、入会ではなくって、少額ですけど切手代位にと四名のカンパです(カンパ代、一五、〇〇〇円です)のでよろしくお願いします。会の皆様の日頃の

御苦労や御活躍を陸々ら御礼申し上げます。くれぐれもお体に氣を付けてせいせいお励み下さいませ。七月二日 (横須賀市 樽見せい)

二 転居

。先日、青森市から左記に転居しましたので、よろしく願ひします。岩国へ一寸行って参りましたが、書簡集などに出てくる地名を具体的に確認、書簡集を読みなおしているところです。(転居先 広島市中区西白島町10の12西白島家族寮B二一 京藤英一郎)

。私たちはこのたび左記へ転居したのでお知らせ致します。信一の生涯は、プロレタリア文化活動時代↓水産時代↓研究教育時代の三時期に分かれ、居住地も八回変えたいわば「流浪の生涯」です。上杉伝来の地で生まれ、徳川発祥の地で歿するの不思議な因縁の運命でしょう。今度の住所は名鉄線の特急で名古屋駅から三〇分、豊橋駅から二〇分の東岡崎駅下車です。機会がありましたらお訪ね下さることを楽しみにしています。(愛知県岡崎市石神町九の二三 船山信一・みちよ)

三 入会

。会報No一六ご送付ありがとうございました。先生の知られざる一面が拝見できてよろこんでいます。私も、ぜひ、入会させていただきたくよろしく願ひ申し上げます。(大阪府堺市 小田正大)

。河上肇記念会への入会金として、どうかよろしく願ひします。(鹿児島市 網屋喜行)

白石遺族よりの挨拶状

。先般、白石嘉(凡)儀永眠に際しましてはご懇篤なるご弔詞ならびにご供物を賜りご芳情のほど有難く厚くお礼申し上げます。お蔭をもちましてこのほど忌明けの法要も滞りなく相済ませました。つきまして

は拝受したご芳志に對しましては誠に勝手ながら、ご答札に替えて、故人ゆかりの「廖承志、王曉雲先生を記念する会」と「東京河上会」へ金封封寄贈させていただきましたので、なにとぞご了承いただきましたようお願い致します。親しく拝趨の上御礼申し上げるべきところでございますが、略儀ながら書中をもってご挨拶申し上げます。

白石美智子

白石 磯

当 番 雑 言

。歴史拒絶の風潮が若い人達の間には広がっていると聞く。気が付くと同世代の間にもあるように感じられる。

日本列島についてみると、縄文期にはせいぜい五〇万人ていどの人口だったという研究がある。いま、一億を越す人が住むという。研究の進展で、縄文期人口が一〇〇万人を越すような結論になるとも思われず、この島々が核戦争に巻き込まれなければ、急に一億を割ることもあるまい。一〇〇万対一億は、一対一〇〇で、生活水準その他は別として、この二五〇〇年ぐらいの間に、一〇〇倍の人口を養うに足る、生産力の発展があったことを示す。人間の知恵は過去をもととして、過去、現在を説明し、未来を予測し、対策することを基本としている。人間の知恵の積重ねによる生産力の発展がなかったならば、現在、日本で生きている人間一〇〇人のうち九九人は生きていられない。このわかり切った事柄と整合し得ない考えなんて、まるで殺人の思想に見える。現在の生活のうち、自分に都合のいい部分を享受しながら、精神的負担を強いられるかも知れない歴史との断絶を感ぜようとするようなトンチンカンな風潮はどうしたものだろうか？まして、自分を、大きく華々しく錯覚するために、他人をその錯覚に巻き込むために、歴

史への拒否を表明する。享受するものはした上で、その恩恵を無視する甘ったれと不通の思想。

歴史における個人の役割は、ふつう、微々たるものであり、その微々たることでさえ、個人にとっては、大変な労苦を伴うことも多いのである。当番生なども、「歴史のために人間があるのではない。人間が生きた結果を歴史というのだ。」などとうそおいた記憶がないではない。いずれにしても、自分の過ぎ来し方、いまのくらしのさまを見るに、とても立派なことを言える柄ではない。

苛烈の時代を生き抜き、失った友の多い、我等の会の会員の方々にはその歴史を語っていただきたい。そして、歴史の拒絶は、拒絶する者自身を含む人類への攻撃に、たやすく転化するものであること等を、わからせてやっていただきたいと願う。

。大河内一男氏逝く。河上肇生誕百年祭のとき、たいそうお世話になった先生である。出張先の車中、ニュースで聞きおどろくも、名前につまれていとなまれる青山の葬に列することはなかりうと予想する。八月二十四日葬儀とジャーナリズムが報じているそう。

。八月十四日、静かになった東都を後に、大阪に赴く。大阪また静か。いまだ会報の印刷上らず。十八号の発送の日も迫るに、十七号のもたつき、いらいらがつる。十五日夜、大阪のまちに雨降る。通りのプラタナス、ヤナギの葉音、秋を告げるからに、総会の日の法然院、浮ぶ。どれだけの会員の方々に、お見えいただけるか。その日までふたつき。お達者で。(お)

図 書 紹 介

河上肇全集 岩波書店(刊行順 前号つづき)

書簡四 昭和一六年より昭和一八年まで

全集月報 27

カワカミ・ハジメ先生のこと(タカクラ・テル)、河上先生の想
い出(柴田敬)、河上肇と日本近代哲学者たちとの交渉(船山信
一)、台湾協会専門学校と河上肇——河上肇研究断片の三(宮本
盛太郎)

編集後記

三十九回目の敗戦記念日、当日の夜、「晴れゆく空の光仰がむ・昭和
二〇年八月一五日の日記」というNHKテレビ(特集番組、ドキュメン
ト人間列島)を観る。

「……この日経済学者の河上肇は、いざわれも病の床をはひいでて
晴れゆく空の光仰がむ」と日記に書いた。……」

と、ナレーションが流れた。番組終了後、編集子は早速に全集第二二
巻の「晩年の日記」を開く。「八月十五日 朝来快晴、気持よし。……」

歌は「あなうれしとにもかくにも生きのびて戦やめるけふの日にあふ」
とのみ。わが耳を疑いながらひょっとすると「うた日記」からの引用で
はないかと、全集第二二巻をとり出す。「枕上浮雲」の、平和来たる—
八月十五日——に、日記に書かれたものを最初に、

あなうれしうれしかりけり生きのびて戦やめるけふの日にあふ

つづいて第三番目にテレビで朗読された歌が書かれている。一応安心
する。だが河上の詩歌に関心のある方はこの番組のタイトルがこの歌の
下の句であることをすぐに理解されたであろうと思うと、歌の心得もな
い自分が恥しい。

敗戦を中学生で迎えた編集子も、早、その前後の歴史を自分の子供や
孫たちに語る側になった。

河上の日記に記録された戦時下の食生活を連想と共感と異和感で読む。
早、四十年、自分は飽食の時代に生きている。だが一方ではアジア・ア
フリカ各地の飢餓を伝聞する。

親戚、友人、門下生に驚くばかりの多くの書簡を書き送った河上の晩
年を読む。ときには寝たきり老人の父と対比する。家庭における老いと
孤独とが早、自分のことのようにも感じられる。

「六十初めて詩を学ぶ」師の精神に習って、詩心を学び、ささやかで
も歴史の語り手に加わろうと思う。

× × ×

前号当番氏の名編集おりを、印刷所との中間に入った編集子の不手際
で刊行を送らせてしまい、台無しとしました。いつものことながらも、
とくに当番氏のストレスを一層蓄積させることとなり、今だ顔を合せて
いません(小平市と嵯峨は遠い故か)。誰か当番氏のストレス解消法を
ご教示願えませんでしょうか。

× × ×

前号の名カット(一〇ページ参照)に登場のセンター生、積み上げた
書物に足がとどかず「センターだより」を休載とのこと、次号までには
踏み台を仕入れ、最新文献情報を取り出すとのことです。(日生)



河上肇記念会

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十二年になります。毎年秋には河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は、事務局へ一報下さい。
〒五四二 大阪市南区島之内一〇一九(丸善石油ビル) 千代田商事株式会社内 河上肇記念会



貧乏物語 初版

河上肇記念会 会則

- 一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。
 - 二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。
 - 三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。
 - 四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。
 - 五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認を与える。
- 世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。
- 六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもつてあてゐる。会費は年額三〇〇〇円とする。
 - 七、この会則の改廃は総会の議決による。

京都（きよう）に「煙」あり

1965年 創刊 只今 47号

「煙」同人社

京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24

児 玉 誠 方

電話 京都 (075) 811-7646 番
振替 京都 2-15653 番

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名(70~80才)が出している異色の同人誌、埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを「声」欄に収めているのも特色

A 5判 120頁 頒価 500円 ㊦ 200円